

三康文化研究所

研究員

オススメ本コーナー

第16回 研究員のオススメ本紹介コーナー

〈インドにおけるヤマ(閻魔)について〉

今回ご紹介いただいた三康文化研究所研究指導員はこちら！



古宇田 亮修 (こうた りょうしゅう)

専門分野: 梵語文献学, 仏教思想史

第1回公開講座では『インドにおけるヤマ(閻魔)について』の題目で講演されます。

今回は、公開講座に先駆けて、公開講座と同じテーマでオススメ本の紹介をしていただきました。

インドにおけるヤマ(閻魔)について

(三康文化研究所研究員 古宇田 亮修 梵語文献学)

古代インドでヴェーダ聖典を奉じていた人々と、古代イランでゾロアスター教の聖典『アヴェスター』を奉じていた人たちは、両者の言語的共通性から、共通の起源を有するとされている。インドにおけるヤマは、古代イランにおいては、「イマ」という名前で行われ、最初の人間にして理想的統治者のイマメジで信奉される。『アヴェスター』には、たいへん難解な文献であり、その解釈には多くの議論があるが、全訳である野田 (2020) により、「イマ」の位置が古く大まかに知ることができよう。

古代インドにおいては、最古の聖典である『リグ・ヴェーダ』に既にヤマは登場している。辻 (1967) および (1970) に、ヤマの登場場所が紹介されている。インドにおけるヤマは、その最初から「死者の世界の王」として登場している。当時の世界観によれば、地上で長寿を達成し、死後はヤマの世界に到達し、祖霊と共に享楽を受けることが理想であった。

そのうち、ウパニシャッドの時代になると、「世界の真理を説く聖者」的イメージで描かれる。辻 (1967) には、岩本裕による『カタ・ウパニシャッド』の全訳が載せられ、ナチケータスとヤマの対話からなる物語を日本語で読むことができる。

仏教におけるヤマ(閻魔)は、天界(楽園)とのつながりが薄くなり、もっぱら地獄へ送り込む審判者(閻魔大王)として描かれるようになる。岩本 (1965) および (1979) でその概要が得られよう。

中世以降のヒンドゥー教でも、ヤマが重要な役割を果たす『ナチケータス』の物語が人気を博してきた。この物語は、『カタ・ウパニシャッド』の発展形の一つであるが、拙訳 (2025) および (2026) により、その内容を知ることが可能となった。

岩本裕 1965『極楽と地獄』三一書房。(三康図書館請求記号:湯山 181.4-194)

岩本裕 1979『地獄めぐりの文学』(佛敎説話研究 第四巻) 開明書院。(三康図書館請求記号:湯山 187.9-194-4)

古宇田亮修 2025『Nāśiketopakhyaṇa『ナシイケータ物語』(上):梵和対訳(第1~9章)』三康文化研究所年報 第56号, pp.1-79.

古宇田亮修 2026『Nāśiketopakhyaṇa『ナシイケータ物語』(下):梵和対訳(第10~18章)』三康文化研究所年報 第57号, pp.1-77.

辻澄四郎(訳者代表) 1967『ヴェーダ・アヴェスター』読摩書房。

辻澄四郎(訳者代表) 1974『ヴェーダ・アヴェスター』読摩書房。(三康図書館請求記号:湯山 129.2-Ts41)

辻澄四郎 1970『リグ・ヴェーダ讃歌』(岩波文庫) 岩波書店。(三康図書館請求記号:湯山 129.2-Ts41)

野田恵剛 2020『原典完訳 アヴェスター:ゾロアスター教の聖典』国書刊行会。(三康図書館請求記号:168-N92)



インドにおけるヤマ(閻魔)について ヤマ(閻魔)とは?

ヤマ(サンスクリット: यम Yama) は、インド神話における人間の始祖であり、また死者の主。仏教の閻魔はヤマに由来する。人間の始祖が死者の主になった理由については、以下のように説明される。ヤマは人間で最初の死者となり、死者が魂を導く役目を見いだした。そして死者の国の王となった。ヤマはよくリグ・ヴェーダ、アヴェスターに見られる Yama(イマ)に対応する神格。リグ・ヴェーダでは死者の魂の導引者として、死者の王、天界にある楽園の王とされる。現在のインドでは、青い顔で牛車に乗った姿で描かれる(本来は黒い顔だが美術上の様式として青く描かれる)。

# インドにおけるヤマ（閻魔）について

古宇田 亮 修  
(三康文化研究所研究員, 梵語文献学)

古代インドでヴェーダ聖典を奉じていた人たちと、古代イランでゾロアスター教の聖典『アヴェスター』を奉じていた人たちは、両者の言語的共通性から、共通の起源を有すると言われている。インドにおけるヤマは、古代イランにおいては、「イマ」という名前で知られ、最初の人間にして理想的統治者のイメージで信奉される。『アヴェスター』は、たいへん難解な文献であり、その解釈には多くの議論があるが、全訳である野田（2020）により、「イマ」の位置づけを大まかに知ることはできよう。

古代インドにおいては、最古の聖典である『リグ・ヴェーダ』に既にヤマは登場している。辻（1967）および（1970）に、ヤマの登場個所が紹介されている。インドにおけるヤマは、その最初から「死者の世界の王」として登場している。当時の世界観によれば、地上で長寿を達成し、死後はヤマの世界に到達し、祖霊と共に享楽を受けることが理想であった。

そののち、ウパニシャッドの時代になると、「世界の真理を説く聖者」的イメージで描かれる。辻（1967）には、岩本裕による『カタ・ウパニシャッド』の全訳が載せられ、ナチケートスとヤマの対話からなる物語を日本語で読むことができる。

仏教におけるヤマ（閻魔）は、天界（楽園）とのつながりが薄くなり、もっぱら地獄へ送り込む審判者（閻魔大王）として描かれるようになる。岩本（1965）および（1979）でその概要が得られよう。

中世以降のヒンドゥー教でも、ヤマが重要な役割を果たす『ナースィケート物語』が人気を博してきた。この物語は、『カタ・ウパニシャッド』の発展形の一つであるが、拙訳（2025）および（2026）によって容易に内容を知ることが可能となった。

岩本裕 1965『極楽と地獄』三一書房。（三康図書館請求記号:湯山 181.4-I94）

岩本裕 1979『地獄めぐりの文学』（佛教説話研究 第四巻）開明書院。（三康図書館請求記号:湯山 187.9-I94-4）

古宇田亮修 2025「Nāsiketopākhyāna『ナースィケート物語』（上）：梵和对訳（第1～9章）」『三康文化研究所年報』第56号, pp. 1-79.

古宇田亮修 2026「Nāsiketopākhyāna『ナースィケート物語』（下）：梵和对訳（第10～18章）」『三康文化研究所年報』第57号, pp. 1-77.

辻直四郎（訳者代表）1967『ヴェーダ・アヴェスター』筑摩書房.

辻直四郎（訳者代表）1974『ヴェーダ・アヴェスター』筑摩書房。（三康図書館請求記号:湯山 129.2-Ts41）

辻直四郎 1970『リグ・ヴェーダ讃歌』（岩波文庫）岩波書店。（三康図書館請求記号:湯山 129.2-Ts41）

野田恵剛 2020『原典完訳 アヴェスタ：ゾロアスター教の聖典』国書刊行会。（三康図書館請求記号:168-N92）